

論文審査の結果の要旨

報 告 番 号	乙 第 1271 号	氏 名	清 水 彩 里
論 文 審 査 担 当 者	主 査 今 村 浩 副 査 田 中 直 樹・川 眞 田 樹 人・川 股 知 之		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>年齢と術前の心機能は大腿骨近位部骨折術後の予後予測因子であること、非心臓手術術後の死亡と術前 BNP は相関することがこれまでに報告されているが、超高齢者における報告はなかった。80 歳以上の超高齢者の大腿骨近位部骨折術後において、90 日死亡率と術前の脳性ナトリウムペプチド (Brain natriuretic peptide, 以下 BNP) 濃度、および心臓超音波検査で評価した心機能と大腿骨近位部骨折術後の予後について、199 床の二次救急病院で大腿骨近位部骨折の手術を行った 133 例 (女性 112 名、男性 21 名) についてデータを収集し解析を行ったところ、以下の結果を得た。</p> <p>① 平均年齢 88.9±5.0 歳の大腿骨近位部骨折術後の手術後 90 日死亡率は 7.5% (10/133) であった。</p> <p>② 半数以上の患者に左室拡張能障害を認め、同年代の健康人の心臓超音波検査の報告に比べ E/e' は高値だった。</p> <p>③ ほとんどの患者 (95%, 126/133) で BNP は基準値を超えていた。</p> <p>④ 生存群と死亡群で、心臓超音波検査で評価した心機能に差はなかった。</p> <p>⑤ 超高齢者の大腿骨近位部骨折術後において、慢性閉塞性肺疾患は 90 日死亡と有意に相関していた (オッズ比 10.578, 95% 信頼区間 1.223-91.475, p=0.032)。一方、BNP 値は、ほとんど相関が認められなかった (オッズ比 1.004, 95%信頼区間 1.000-1.008, p=0.081)。</p> <p>以上より平均年齢 88.9 歳の大腿骨近位部骨折患者では、半数以上の患者に左室拡張能障害が認められた。しかしながら、90 日死亡と左室拡張能との関連はなく、BNP との関連も明白ではなかった。高齢者で左室拡張能が低下することはすでに報告されているが、大腿骨近位部骨折患者では同年代の非骨折患者の平均よりも左室拡張能がさらに低下している可能性があった。また本研究から、慢性閉塞性肺疾患は 90 日死亡と有意に相関していた。これらの結果は、世界中で高齢化が進む中、周術期の呼吸・循環管理に有用な情報と考えられた。</p> <p>以上より、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			